

あの夏の思い出
～1989年・夏～

こひろ

昭和から平成に変わった年、1989年。その夏。

あの頃の俺たちが好きな音楽は浜田省吾、ブルーハーツ、尾崎豊、米米クラブ、BOOWY、TMネットワーク、レベッカ、プリンセスプリンセスなどだった。アイドル歌手たちが少しずついなくなり、CDが完全普及しレコードが製造中止になった頃。俺たちが聞く音楽はそういうものだった。その中でも渡辺美里が俺たちの一番のお気に入りだった。

まだ携帯電話もインターネットもipodもなかった時代、そういう音楽たちが俺たちの心を満たしてくれたのだった。

そう、「俺たち」。俺たちは親友なんて大げさなものではなく、気の合う「仲間」だった。好きな音楽たちと共に、時には真面目な将来の話をしたり、恋愛の話をしたりする。そして時には馬鹿なこともするけれど、そんなことさえも輝いて見えた「時間（とき）」を共有する仲間。何もかも、時には悩みでさえも輝いて見えたあの頃……。そんな時間も、いつかは終わりがやってくる。

高校3年生の石井直人は、当時の普通の高校生だった。中学からやっていたバレーボール部に高校でも入部したものの、背があまり伸びなかったことと、技術の壁にぶつかったこと、そしてなにより情熱がなくなったことで1年生の冬休み前に退部した。バイトはたまにやったが、一人っ子のせい、小遣いにはそれほど苦勞をしていなかったのであまりやらなかった。成績は中の下といったところだった。

大学を目指す高校生の2～3割程度は浪人するのが当たり前の時代、無理して現役で1ランク下げて合格するよりは浪人してでも上の大学を目指す時代。周りがそうでも将来なりたいものもわからず、浪人してまで良い大学を目指す明確な理由も見つからない俺は、周りが徐々に受験モードに変わっていくことについていけなかった。とりあえず「進学」と進路希望を出してはいるものの、何かを犠牲にしてまで勉強をする気が起きなかった。

どうしてみんなは受験という現実を簡単に受け入れられるのだろうか。それともみんなは将来のビジョンがしっかりしているのだろうか。偏差値という物差しで優劣をつけられた大学はそれほどまでにランクによって違うものなのか。尾崎豊も授業で教わることの無意味さを歌っている。

本当の優劣なんかわからないのに、社会的に上位ランクとされる大学を目指すため、受験勉強に明け暮れ、このまま高校生活が終わってしまうことの淋しさを俺は気の合う仲間4～5人に熱く打ち明けた。

俺の意見に賛同して、「何か高校の思い出をつくろう」と言ってくれたのは、二人だった。クラスの中には、予備校の夏季集中ゼミとかに参加し、「夏休みの過ごし方で勝負の半分は決まる」と言う奴に対し、浪人することよりも高校生活の思い出がないほうが怖いと嘯いたのだった。

賛同してくれた一人は山際達也。バスケットボール部で一応レギュラー。夏休みに入りすぐ始まる大会を最後に、部を引退する。今までの部の実績からも3回戦程度で負けるのが目に見えているらしく、今までは夏休みの半分は部活に明け暮れていたのので何をして良いかわからないと言った。まあ何をするかは「受験勉強」に決まっているのだが、いきなりモードを変えるのは難しいのだろう。達也は運動部の割にはあまり体育会系のノリはなく、女の子に対してもシャイな一面を持つ反面、場の雰囲気はしっかり把握し、はしゃぐ時ははしゃいだりする若干「お調子者」である。進路は経済学部の希望らしいが、将来のことは俺ほどではないがあまり考えていないようだった。

もう一人は久保淳史だった。今は俺と同じ帰宅部だが、2年生の年明けくらいまでは美術部にいた。油彩がメインの部の中で、アクリル絵の具でイラストタッチの絵を描く淳史は顧問と元々折り合いが悪く散々「芸術がわかってない」と詰られたらしい。2年生になりナントカ展で顧問に酷評された絵が賞を取ったのを機に「先生は所詮その程度ですね」と捨てゼリフを残し辞めたのだった。成績は学年トップクラスで、将来もきちんと考えているみたいだ。これからは情報処理とかパソコンの時代が来ると言っ、そういう分野が勉強できる理系の大学を受験するらしい。いつもクールで必要なことしか言わない奴だが、感性は俺と似ているので気が合った。

ただ3人で実際何をやるかとなると、なかなか決まらなかった。自転車で寝袋を持って遠出するとか、鈍行列車で北海道まで行こうとか、いくつか案が出たものの辛い思いや、何か目標に向かってがんばると言うのは俺たちらしくない。

そんな時に達也の家が別荘を持っているということがわかり、そこに1週間合宿をしようと思った。合宿と言ってもただ1週間親の目を離れて好きな音楽を大音量で聴き、遊ぶだけというもの。それでもその合宿はきっと素晴らしいものになり思い出になると確信できた。

夏休みに入る3日前、梅雨明け間近の放課後、マクドナルドで100円シェイクを飲みながら最終的な打ち合わせに入っていた。

合宿に親や先生が同伴では意味がない。そのためには、高校生だけで行けるよう親が納得する、もっともらしい理由付けをしなくてはならない。

理由はこうだ。夏休みの宿題の自由研究で、天体観測をするため別荘に泊り込みたい。勿論昼間は受験勉強をする。多分親は子供だけで心配だとか言うだろうけど、「僕らはもう17歳だし何かあれば電話するし、目的は勉強」と説得すれば男の子の親は恐らく平気だろう。

そして成功のもう一つのポイントは、気の合うメンバーで行くということだ。俺たちが仲良くなったのも音楽がきっかけだった。それまでクラスが同じでも別のグループ同士だったのだが、1年生の終わり頃にふとした会話の中から、音楽は何を聴くかという話になり、最近では渡辺美里と尾崎豊というところで意気投合をした。その頃そんなに深く友達選びをしていなかったが、すごく気の合う友達を見つけた気分だった。

当然メンバーには、女の子がいないよりいた方が良いに決まっている。そのため淳史に恋人の高宮久美子を上手く説得して、吉田亜紀ともう一人女の子を連れてきてもらうことにしていた。吉田亜紀に関しては高宮久美子の一番の仲良しだし、俺たち3人とあと2、3人プラスしたメンバーでボウリングや遊園地に行ったことはあったので、成り行きで誘うということにはなっているが、「吉田も誘ってもらおう」と言った達也が惚れているということは俺も淳史も気が付いていた。

「大分決まったな。このスケジュール表を見せれば、男の方の親は何とか説得出来るだろう」一日6時間の勉強プラス5時間の天体観測という有り得ないスケジュール表を書き終え、淳史が一段落という感じで言った。当面の問題は女の子の参加である。

「淳史、高宮は上手くいきそうかどうか、なんか言ってなかったのか？」

達也が心配そうに淳史に聞いた。

「いや昨日の電話では『今日返事をもらう』としか言ってなかったからな」

淳史がそっけなく答えたとき、高宮久美子が入って来たのが見えた。淳史はさっと手を挙げると、高宮は俺たちを見つけ、駆け寄ってきた。

「ごめん、あっくん待った？」

笑顔で謝る高宮久美子は学年1、2と評判なだけあって、いつ見てもかわいい。成績も淳史ほどではないが学年上位で当然俺より上である。淳史は偉そうな口調で言った。

「で、どうだ？」

真相は聞いた事がないのでわからないが、噂では1年生の文化祭の時に高宮の方から淳史に告白したらしい。だからなのか淳史はいつも高宮に対して語気が強い。淳史とはあまり恋愛の話はしなかった。

高宮は淳史の隣に腰掛け言った。

「ごめんね、ちょっと無理みたい。亜紀もサチも行きたいとは言っているけど、日帰りならともかく泊まりは親が許してくれないって。サチは行く気満々で、貸し別荘に女の子3人で行くって親に言ったけど高校生だけはダメだって。かなりオープンな家らしいけど最低20歳以上の身内が保護者として同伴が条件だって。私はあっくんに会いに親にどんな嘘ついても、例え一人でも絶対行くからね」

言いながら高宮は淳史の腕を掴んだ。淳史はそれに対して顔色を変えず言った。

「じゃあ作戦Bでいくか」

吉田たち女の子がこの段階で参加しないことも想定していたので、次の作戦も考えていたのだが、高宮はそれを知らなかったようで少しすねながら言った。

「何よそれ。どうやって謝ろうか考えながら来たのに、全然期待されてなかったんだ」

高宮は普段校内ではクールな優等生なのに、淳史の前では見事にキャラクターが違う。最近は何んか俺たちの前でもお構いなしだ。

「まあそんなにすねるな。サンキューな」

淳史と高宮の会話を無視するように、作戦Bに反対な達也が聞いた。

「そういえばサチって誰？」

高宮はまだすねているようだったが、達也の質問に答えた。

「井上咲、最初の自己紹介でサチって聞こえたでしょ？だから女子の間ではみんなサチって。それよりも作戦Bって何か教えてよ」

「井上咲か。それは使えるな。作戦Bよりいけるかも。井上が乗り気だというのは意外だけどちなみに吉田も乗り気なんだよな？」

達也は高宮の質問を全く無視して言った。どうしても吉田が気になるのだろう。

「うん、乗り気だと思うよ。ちゃんと言われたとおりに説明したら、すごく行きたいって言ってたから」

高宮は自分の質問は無視されたのに、達也の質問にはきちんと答えた。淳史にはもったいない彼女だとたまに思う。達也は満足そうに自分の考えを言った。

「井上の兄貴は3月までうちの高校にいた人で、俺と同じバスケット部の先輩だったから、頼んで保護者になってもらおう。井上先輩なら俺が話をつけられると思う」

「おい、そのどこが作戦Bよりマシなんだよ？」

淳史が不満そうに言った。そして少し間をおき続けた。

「それに待てよ。井上先輩じゃ20歳になってないじゃんか」

淳史の意見に俺も賛同した。そもそも井上先輩をあまり知らないが良い噂は聞かない。俺は言った。

「この際、話がわかる保護者一人ぐらいは仕方無いとは思う。そもそも話がつぶれたら元も子もない。だけど保護者選びは慎重にしないと。井上先輩じゃ台無しになる気がする」

高宮までもが申し訳なさそうに反論した。

「山際君には悪いけどサチのお兄さんじゃ、サチは行かないと思うよ。サチとお兄さんあまり仲良くないらしいし。それにサチの親の条件満たしてないから、どのみち無理だと思う。それより作戦Bっていうのをいい加減教えてよ」

「俺は乗り気じゃないんだよな」

達也が不服そうに言った。全員に自分の意見が否定されてもなお、達也が教えないので、淳史が代わりに高宮に説明し始めた。

「久美子から吉田の好きな奴を教えてもらって、そいつをメンバーに加えるんだ。そうすれば俄然吉田の行く気が増すはずだ。久美子の話じゃ吉田には3つ上の大学生のお姉さんがいるみたいだから上手くいけば、担ぎ出してくれるかもしれない。女の子の親から保護者の話がでるのは、ある程度予想はしていたんだ。勿論そいつには吉田が好きだということを知らさないし、俺たちもたまたま誘ったことにする」

達也にすれば乗り気な訳がない。実はこれは達也が俺たちに恋心を打ち明けないことへの意地悪で、本気ではない。吉田の好きな奴が誰かもわからないのに、そんなどこの誰かわからない奴と合宿に行く気はないのだ。そんなことを知らない高宮は困り顔で、申し訳なさそうに言った。

「あっくんごめん。私、亜紀の好きな人知らないんだよね」

明らかに知っているのに隠しているという感じだったが、まあそれを深く追求してもその作戦自体本気ではないのだ。淳史は優しく言った。

「じゃあしょうがないな」

淳史の言葉に高宮と達也はホッとした感じだった。とりあえず別の作戦を考えることにし、今日は解散となった。

家に帰りながら、この合宿に女の子の参加は無理かもしれないと思った。ならば男3人も悪くないか。そう思いながら空を見上げると満月だった。

こんなことを考えているせいか綺麗な満月もやけに淋しく見えた。少し淋しいかもしれないけど、男3人も悪くないじゃないか。もう一度、今度は声に出し呟いた。

「ただいま」

「お帰り」

俺を迎えてくれたのは姉ちゃんだった。

「あれっ。どうしたの？」

姉ちゃんといっても母の姉の子。つまり従姉弟である。元々母子家庭だったが10年くらい前、姉ちゃんが高校に入った頃に伯母さんが亡くなり、家に下宿のような感じで住むようになった。俺と8歳も離れているせいか、いつも俺のことを子ども扱いしたが、一番の理解者でもあった。しかし一昨年、自立すると言って家を出てからは年に2、3度しか顔を出さない。

一緒に住んでいる約8年間、俺に色々な事、それこそ良い事も悪い事も教えてくれたのは、だいたい姉ちゃんだった。

俺が中学2年生の時も、何気なく「タバコってどんな感じなんだろう」と言った次に日に、缶ビール1本とタバコ1箱を持って俺の部屋に来て、親に内緒でタバコとビールを飲ませてくれた。そしてタバコにむせる俺に

「別に酒もタバコも美味しくないでしょ？子どもの頃は体に良くないから受け付けないようになっているのよ。成長にも悪いしね。それでも自分で考えて、自分でバイトとかして稼いで、もし退学とかになっても自分で後始末できるなら姉ちゃんは止めないし、そのときは直人の味方をしてあげるけど、人に迷惑をかけたり、後から自分で責任が取れない馬鹿なやり方だったりしたら私も許さないからね」

そう言って残りのビールを半分ずつ分け、真っ赤になった俺にまだ19本残ったタバコの箱を渡し

「後は自分でゆっくり考えなさい。私は今でもタバコは吸わないけどビールとセックスは高3から始めたけど、誰にも迷惑はかけなかったよ」

そうカミングアウトして姉ちゃんは俺の部屋から出て行った。そのタバコは同じ本数で湿気たまま、今も机の引き出しに入っている。自分が住まわせてもらっている家の子に随分なことだが、俺はそんな姉ちゃんが大好きだった。俺の問いに、

「うん、転職することにして1ヶ月ほど無職なの。だから食費浮かすために、その間だけ居候させてもらおうと思って」

姉ちゃんは舌を出して悪びれず言った。俺は飛び上がって喜びたくなった。まさにうってつけの保護者だ。20歳以上しかも社会人、まあ今は無職だけど。しかも女性だから女の子の親にも受けが良いだろう。

「そっか」

俺の嬉しそうな顔に姉ちゃんも歓迎されていると感じたのだろう、微笑んでいる。

「じゃあ一ヶ月の間暇なんだよね？俺たち8月の5日から1週間ほど天体観測の合宿に行くんだけど、姉ちゃんが保護者として一緒に来てくれないかな？」

靴を脱ぎながら言う俺に

「突然だね、ところで直人、何か企んでるんだろう？」

と姉ちゃんは言った。俺は昔から姉ちゃんには隠し事が出来ない。姉ちゃんとは従姉弟だからどうしようもないし、どうにかするつもりも毛頭ないが、俺の初恋は多分姉ちゃんなのだろう。

「姉ちゃんには敵わないや」

俺は計画を話した。といってもメインは思い出作りで、悪さをしようというわけではない。ただ多少は羽目はずすだろうが。

「わかった、いいよ。引き受けようじゃないか」

姉ちゃんは豪快に胸を叩き、そしてむせた。

そういえば俺たちの絆になっている渡辺美里を聴くきっかけも姉ちゃんのお奨めだった。

「そういえば、お土産に渡辺美里のニューアルバム買ってきてあげたよ」

そう言って姉ちゃんはCDを俺に手渡してくれた。

翌日、学校で姉ちゃんの話をして、受験勉強の合宿ということを目に出し女の子の参加もほぼ大丈夫ということになった。

その後話はトントン拍子に進み、最終的には8月5日から5泊6日と決定し、俺たちは姉ちゃんの車で行き、女の子たちは3日目から2泊で後から電車で参加することに決まった。

夏休みに入り俺は毎日音楽を聞きながらゴロゴロしていた。姉ちゃんは次の会社は決まっているらしかったが、どこに行っているのかだいたい日中は出掛けていた。ある日の夜、姉ちゃんが俺の部屋に来た。

「どう美里の新しいアルバムは？」

俺がもらったCDを聴いているのをわかったらしく姉ちゃんが聞いた。

「聴いてないの？最高だよ。カセットテープに落とそうか？」

俺の言葉に姉ちゃんは

「最近あまり音楽とか聴かなくなってね。暇なときにテープに落とすとして。ああいつでも暇か」

と憎まれ口を叩きながら、あまり気のない返事をして床に座った。

「受験勉強はどう？少しは、やっているの？」

姉ちゃんにしては珍しいセリフだ。父親か母親の差し金だろうか。

「うん。ぼちぼち」

中学生の頃はたまに勉強をみてもらってことを思い出した。姉ちゃんはそのところ頭が良かったらしいが、あまり勉強をしているのを見たことはなかった。

「私は推薦で短大入っちゃったからね。受験勉強とは縁がなかったからな」

そう言いながら机の赤本をパラパラと捲った。

「はは、もう全然わかんないや」

「姉ちゃんは推薦だったんだ。良いなあ」

俺の言葉に、姉ちゃんは笑っていた。

「直人は、学部はどうするの？」

学校と親には法学部ということにしてある。だが実際はそれほど深く考えていなかった。姉ちゃんに見栄を張っても仕方ないと思い

「どこでも、日東駒専あたりを受験して受かったところに行くから」

姉ちゃんは優しく微笑んで

「そっか、まあ今はそんなものかもね。がんばってね。はい小遣い」

そう言って千円を俺に渡して部屋から出て行った。この千円の意味はこの話が両親に伝わることを意味していた。昔から姉ちゃんはスパイになりきれなくて後で「ごめんね」と言って小遣いをくれた。まあばれて困ることはなかったし、親も姉ちゃんから聞いたことで俺に何かを言ったりしなかったので問題はなかった。しかし今回は違った。

翌日の夜、普段はほとんど口をきかない父親が部屋に来たのだ。

「直人、ちょっと良いか？」

普段は良く言えば「放任主義」、悪く言えば「ほったらかし」の父親が珍しく難しい顔をしている。

「ああ、何？」

「お前将来のこととかちゃんと考えているのか？」

姉ちゃんが父親にどう言ったのかわからなかったが、良く言ってないことは父親の言い方でわかった。

「父さんはどうして大学に行こうと思ったの？」

「父さんか？父さんは学校の先生になりたかったんだ。でも教員採用試験に落ちて、今の会社に入った。だからお前が何かやりたいことがあるなら、あきらめないでがんばって欲しい」

父親とこういう話をするのは初めてだった。俺は怒られるかもしれないと思いながら正直に言った。

「正直まだ良くわからないんだ。大学はそれでも許されるなら行ってみたい」

すると父親は思いのほか穏やかな顔で言った。

「何をしても、しなくても別に良いけど、最後に誰かの所為にはするなよ」

その言葉の意味はまだわからなかった。ただ妙にその言葉は頭に残った。

だが父親と話した後も特に受験勉強は進まなかった。頭の中は合宿のことで一杯だったのだ。今の俺にとって合宿はどんな海外旅行よりもすばらしいものに思えた。受験勉強は以前より更に無意味に思えていた。しかし父親も姉ちゃんもあの日以来、勉強のことは何も言わなかった。

数日後、達也のバスケットボール部は予定通り(?)に3回戦で敗退したと連絡が入り、何も障害はなくなった。あとは出発の日を待つばかりだった。

出発の朝。

物置にしまってあった年代物の天体望遠鏡、夏休みの宿題や受験勉強の参考書を少々、それから水着、姉ちゃんが友人から借りてきたというビーチパラソル、サマーベッド、それにバーベキューセット、車に並べると何が目的なのか見るからに怪しかった。姉ちゃんは口では子供のお守りは面倒くさいとか言っていたが、明らかに顔は楽しそうで、3日前に水着を新調していたのも俺は知っていた。荷物を詰め終えた後、朝食の最中母親が言った。

「美代ちゃん、多少は楽しむのも良いけど、ちゃんと生活の監視をしてよ。まあ私の子だから直人に勉強しなさいって言ったって、するような子じゃないのはわかっているけど、他のお子さんのこともあるから」

「大丈夫よ、叔母さん。都会から離れて星を見るだけだって十分勉強よ」

姉ちゃんは気休めになるかも疑問の返事をしていたが、そんな姉ちゃんの言葉が俺の心を益々弾ませた。

姉ちゃんはノースリーブに短パンという、高校生の俺たちには少し刺激的な格好だった。一緒に住んでいる俺でさえ一瞬ドキッとしたくらいなので、達也や淳史はもっと思ったことだろう。だが車を走らせながら話すうちに、色気よりもむしろ格好良さを感じたみたいだった。

車の中では8月の終わりにある渡辺美里の西武球場ライブに3人で行くことを姉ちゃんに話し、カセットテープを聞いた。

「美里最高！」

と叫ぶ俺たちに姉ちゃんは優しく笑いかけてくれた。

途中サービスエリアでお弁当のおにぎりを食べたりしながら約4時間のドライブの末、午後1時ごろ別荘に到着した。

別荘の外見はまあまあ綺麗だったが、中は約2年使っていないということでもかなり埃まみれだった。達也が親に友達と使いたいと言ったときに、たった一つ条件に出されたのが掃除だったらしい。家は住んでいないと荒れると言うが、本当になんでこんなに埃まみれなのか不思議だった。

「これじゃ今日中に片付かないな」

俺が愚痴をこぼしながら横を見ると、達也と淳史もお手上げのポーズをした、しかし姉ちゃんはポジティブだった。

「何言ってるの。明日から遊ぶために今日がんばらなきゃ。私は晩ご飯の買い物に行ってくるから、まず部屋の窓を全部開けて、直人は掃除機。それから淳史君は布団を干して頂戴。達也君はトイレとお風呂掃除。あと家から持ってきたシーツを出しておいてね。私も帰ってきたら手伝うから。そうそう、それと初めに言っておくけど、私は一応保護者なのだから淳史君も達也君も私のことを『お姉さん』か『姉ちゃん』と呼ぶようにね。美代子さんなんて呼んだらグーだからね」

拳を見せ、わざとらしい怖い顔を作り出掛けていった。

姉ちゃんが出掛けた後、淳史が言った。

「お姉さん格好良いよな、大人って感じだし。それに比べ久美子なんか子供だよな」
俺は何か少し嫉妬しているような感覚を覚えた。そして少しだけ不機嫌に言った。

「何言ってるんだよ。心配しなくても姉ちゃんから見たら淳史も立派な子供だよ」
淳史は苦笑いしながら

「そうだな」

と言った。

俺と淳史のやり取りが終わったのを確認して、達也は自分の家の別荘だからというよりはむしろ姉ちゃんに言われたからという感じで言った。

「早く掃除しようぜ」

来る間のわずかな時間だけで、淳史も達也も姉ちゃんのファンになった感じだった。掃除を始めて約1時間後、姉ちゃんが帰ってきた時にはまだ掃除というよりは散らかしている感じに近かった。呆れながらも姉ちゃんが仕切り始め、指示を出すようになってからは飛躍的に能率が上がり、6時ごろには8割がた掃除は終わった。

「お疲れ様。これから私はちゃちゃっとカレーを作るからその間に順番にシャワーでも浴びちゃいなさい」

俺たちは男子の寝室になる部屋に荷物を運び、最初に達也がシャワーを浴びに行った。達也が行った後、くつろぎながら淳史が言った。

何か初日だし全然遊んでないし、お姉さんはわりとちゃんと保護者だけど、楽しいな」
俺も心からそう感じたが、格好をつけて

「ああ」

と気のない返事をした。しかし顔はにやけていたことだろう。

3人が順番にシャワーを浴び終えたころ、カレーの準備もだいたい終わったようで姉ちゃんもシャワーを浴びると言って風呂場に向かった。淳史と達也は覗けないかと調べに行ったみたいだが、無理そうだというのが結論らしく俺と一緒に風呂に入ったことがあるかを聞いてきた。俺は小学生のとき1度だけ入ったことがあって、その時すごく恥ずかしくて2回目を断ったら姉ちゃんが淋しそうにしたのを今でも覚えていたが、「ない」と嘘をついた。

風呂上りの姉ちゃんはキャミソールで少しだけ色っぽく見えたが、晩ご飯の準備の指示を出す姿にその思いはすぐに消えた。達也と淳史が胸元を見ないようにしながらも見たそうにしているのが可笑しかった。

晩ご飯のカレーライス普通の味なのだろうが、とてもおいしく感じた。

「美味しい！」

3人が言うと、姉ちゃんは

「当たり前でしょ」

と言ったが、すごく嬉しそうだった。そして姉ちゃんなら「ビールでも飲もう」と言うかと思ったが、そんな素振りも見せず俺たちに後片づけを命じ女子の寝室となる部屋に行ってしまった。

片付けが終わり、部屋の襖をノックすると

「何？」

姉ちゃんの声は心なしか元気がないように思えた。

「俺、直人。一応天体望遠鏡をセットするから車のキーどこ？」

「あ、ごめん。入って」

襖を開けると部屋は真っ暗だった。カギを持ってくる姉ちゃんの目には涙らしいものが見えた

。

「姉ちゃん、どうしたの？」

俺の問いかけには答えずカギを渡し、

「すぐ行くから先に始めてて」

と言うだけだった。

天体望遠鏡をセットし始め、5分もしないうちに姉ちゃんは今までと変わらない感じでやってきた。そして俺たちのあまりの手際の悪さを見かねて、方位磁石で方向を確認するかピントの合わせ方を教えてくれた。

「よくこんなんでも自由研究に天体観測をしようと思ったね」

呆れ顔で聞いてきた。俺は少しすねたふりをして言い訳をした。

「だってちょうどいい口実だったから」

姉ちゃんは後ろから、座っている俺を抱きしめながら言った。

「直人はかわいいね」

そして頭をなでた。俺は背中に胸が当たるのを感じて、腕を振りほどきながら言った。

「やめろよ。恥ずかしいな」

「何照れてんの」

姉ちゃんはそう言って俺の髪の毛をくしゃくしゃにした。それを見て達也が笑っていた。

やっと準備が終わり、観測を始めると、空は都会とは違って星がたくさん輝き綺麗だった。俺たちはとりあえず事前に決めてきた、火星、夏の大三角形のベガ、デネブ、アルタイルの位置を探した。するとほとんど天体観測の経験がない俺たちにも簡単に見つけることが出来、時間、方角などを適当に記録し始めたが、さすがにこれでは格好がつかないことに気がついた。

「どうするか、一応図書室から本借りてきたから、勉強するか？」

淳史が、仕様がないうのをありありで言った。すると姉ちゃんがあまりの体たらく振りに我慢が出来なくなったのか口を出した。

「本当にあんた達は無計画ね。いくら観測が口実って言ったってひどすぎるわよ。夏の学生の観測といえばペルセウス座流星群でしょ？」

「そうなの？」

俺が聞くと

「まあ、私も高校時代に少し観測しただけだから、ちょっと昨日調べ直したけどね」

そう言って舌を出して簡単にペルセウス座流星群の説明をしてくれた。ピークは再来週くらいらしいが上手くいけば今週も1時間当たり1、2個は見られるかもしれない。俺たちはそれに決め部屋に戻りスケジュールを立てることにした。

足元が蚊に刺され痒かったが、なんだかそれさえも夏の思い出のように感じ楽しかった。

観測はある程度の範囲を見渡すため天体望遠鏡は使わないことにし、見えた個数、方角、時間を記録することにした。日程は今日を抜かせば後4日間。そのうち2日間は女の子もいる。さすがに徹夜をするほどの根性はないし、それに昼間は遊びたいから睡眠時間は必要だ。結局観測は10時から午前1時の3時間ということで落ち着いた。

「流れ星なんて本当に見られるかな？」

達也が真顔で言うので、淳史がチャンスとばかりすかさず言った。

「そろそろ白状しろよ。流れ星に何を願うんだ？」

達也はごまかそうとしていたが、やがて観念したかのように

「まあ、淳史には必要のない願い事だよ。彼女が出来ますようになってお願いするんだよ」と半ばヤケクソ気味に言った。そんな達也に気を使い、淳史がなるべく優しく問い詰めていく感じが面白かった。

「誰か好きな人いるのか？俺たちも知っている奴か？」

俺は吹き出しそうなのをこらえた。俺ならここまで来たら、「吉田が好きなんだろう？」と問い詰めた方が早いような気もしたが、淳史も半分面白がっているのだろう。俺はその会話に入らず、縁側に座り空を見上げた。これだけ綺麗な星空と対面すると何となく星に興味を覚えた。大学でこういうことを勉強するのも悪くないかと思った。近所の別荘群の明かりもあり、星が落ちてきそうな空とまでは言えなかったが、確かに姉ちゃんが母親に言っていたように星を見るだけでも普段と違う感覚を覚え、来た甲斐があった気がした。

やがて居間から、淳史の声がした。

「直人！達也が吐いたぞ。やっぱり吉田のことが好きなんだって」

達也が横で何か文句を言っている。俺は仕方なく部屋に戻り、達也に助け舟を出してやろうとした。しかし淳史はまだ問い詰めている。

「それで、今回勿論告白するんだろう。協力して二人にしてやるぞ」

すると達也から意外な言葉が返ってきた。

「俺、前から思っていたんだけど、吉田は直人のことが好きなんじゃないかな？」

その時どこに行っていたのか、姉ちゃんが戻って来て言った。

「何の話？私にも教えてよ」

達也が困った顔をしていると、淳史が全部喋ってしまった。姉ちゃんは話を聞いた後に真剣な顔で言った。

「この合宿の間は恋愛禁止にしましょう。淳史君と久美子ちゃんも含めて。良いわね？」

明らかに横暴な話で、増して淳史には関係のない話だが、俺もその方が良いような気がした。今日は初日でまだ何もしていないけど、健全な生活も親がいないだけで楽しいような気がし始めていた。すると反対するかと思った淳史が意外にも

「そうしよう。もし達也の言うことが合っていたら誰かが嫌な思いをすることになる。明日久美子には電話してそれでも来るか聞いてみるよ」

と言った。

「ありがとう。淳史くん。お礼にキスしてあげたいくらいだけど、久美子ちゃんに怒られちゃうからね」

姉ちゃんはそう言って淳史の頭をなでた。淳史は照れながらも、うれしそうだった。達也はどうなのだろう。俺と淳史は今回の合宿で達也が告白すると勝手に決めていたので、それを潰されるのは嫌なのではないかと思ったが、表情からは何も読み取れず、そして何も言い返さなかった。結局それからその話題はせず、明日に備え12時前に就寝となった。寝室に行き電気を消し布団に入ると、さっきからずっと黙っていた達也がようやく口を開いた。

「直人、お前吉田のことどう思う？」

部屋を暗くしたばかりで目が慣れていない所為か、達也の表情は見えなかった。達也は俺に何と答えて欲しいのだろう。

「何だよ、急に」

正直何とも思ってなかったが、達也の期待している答えがわからず、はぐらかした。淳史は何も言わなかった。

達也は話し続けた。

「先週吉田から詳しいこの場所や電話番号とか、調理器具はあるのかとかの確認の電話があって、そのとき直人の食べ物の好みとかをやたら聞くから、『直人のことが好きなのか？』って聞いたんだ。そしたら違うとは言っていたけど、あれはイエスのサインを俺に送っている感じだった。もし直人がその気なら俺は吉田のことはあきらめるし、付き合えるように協力するよ」

俺が黙っていると、淳史が聞いた。

「お前本当にそれでいいのか？」

「でも吉田がそれを望んでいるなら、俺は応援したいし、直人ならあきらめもつくから」

達也は少し淋しそうな感じだが、はっきりと言った。俺は健気な達也を哀れんだわけではなく、正直な気持ちとして言った。

「俺は吉田のことを恋愛対象と見たこともないし、この合宿は姉ちゃんが言ったとおりに恋愛禁止でいこうと思っているから。達也が吉田に告白しようが、あきらめようが俺には関係ないよ」

すると達也は吉田の「良い所」を話始めた。俺は達也が本当に吉田のことが好きなのだとわかり

「もうわかったよ。取らないから安心しろ」

と言って相手にするのをやめた。その後も達也と淳史がなにやら話しているのがわかったが会話の中味は良く聞こえず、そのうち俺は眠ってしまった。

二日目の朝、7時に姉ちゃんに起こされた。俺が

「まだ、早いよ。姉ちゃん、休みなのにこんな時間に起きるなんて年取ったんじゃないの？」と憎まれ口を叩くと、姉ちゃんは持っていたお玉で俺の頭を叩き言った。

「せっかく今日は海水浴にしようと思ったのに、勉強をやりたいみたいね？」

横で淳史と達也もキョトンとしながら起き上がり何事かと俺にアイコンタクトを送ってきた。3人が無反応なのを無視するかのようには姉ちゃんは言った。

「私がお弁当を作っている間に、昨日の掃除の残りを片付けてね。9時には出発するからシャキシャキ動くのよ」

俺は姉ちゃんが新しい水着を買ったのを思い出し、自分が行きたいのだと悟ったがそれは言わないことにした。達也と淳史は飛び起きて行動を開始している。なんか家にいるより健康的で手伝いもしているのに楽しいから不思議だ。

車で10分ほどのところに海水浴場があった。9時半前なのに結構人がいて驚いたが姉ちゃん曰く、夏の海水浴場とはそういうものらしい。俺たちは下に着込んだ水着姿になり海へと飛び込んだ。30分ほど泳ぎ、姉ちゃんのところへ戻ると全身日焼け止めを塗りながら、ビキニの水着になった姿で出迎えてくれた。達也と淳史はヒソヒソ何か言っている。きっとナイスバディとか言っているのだろう。セクシーさはなかったがスリムで引き締まった体だと俺も思った。俺が一休みしようと横に座ると同時に、姉ちゃんは立ち上がり言った。

「直人競争しよう」

俺の返事を待たずに、手を引き今上がったばかりの海へとまた引き戻された。姉ちゃんの表情は楽しそうにも見えたが、無理に楽しもうとしているようにも見えた。海水浴エリアを仕切るブイまで競争をし、姉ちゃんが勝った。すると満足そうに

「ははは、参ったか」

岸に戻り仁王立ちしてそう言う姉ちゃんは、いつもの姉ちゃんだった。しかし、今回家に戻ってきてからずっと何か違和感を覚えていた。昨夜といい、時折見せる暗い表情に何かあったと感じずにはいられなかった。結局姉ちゃんは紫外線がどうか言って、その一回きりしか海に入らずお昼を食べて間もなく別荘に帰ることになった。まだ2時である。俺たちが別荘に着いてからも、まだ泳ぎたかったと不満を言っていると、姉ちゃんは

「どうせ明日から女の子も来るし、今日位少し勉強しなさい」

と居間のクーラーをつけ言った。俺たちは渋々了承したものの、姉ちゃんが部屋から出て行くと話は脱線してばかりで、結局ノートに勉強の形跡は残らず、この合宿中にもう参考書を開かないことはほぼ確定した。やがて2時間ほどして、どこかに出掛けていたらしい姉ちゃんが帰ってきて晩ご飯の準備を始めた。メニューはトンカツだった。

その夜の観測は約1時間空を見続けたが、雲が多く成果がなく打ち切った。時間が早かったので居間で話しをしていると、少しずつ真面目な話になり、大学に行く理由になった。姉ちゃんが言った。

「私は正直、高校出たら働くつもりだったんだけど、直人のお母さん、私から見たら叔母さんが、気を使ってくれてね。私は勉強したいこともないし将来何をやりたいというのはないからって言ったら、『尚更行きなさいって。やりたいことが見つかるかもしれないし、見つからなくてもちゃんと大学生としての経験が残るから』って言ってくれて、短大に行ったんだ。今では行って良かったと思うよ。友達も増えたし、世の中まだまだ学歴社会だからね」

俺も初めて聞いた話だった。そのころ俺はまだ小学3、4年生だったのだから仕方ないが、両親がいない姉ちゃんは進学するか就職するかを一人で色々考えたのだろう。

達也が言った。

「俺なんか正直大学に行く理由は、“遊びたいから”だけだな。勿論バスケットは続けたいけど多分俺の実力じゃサークルレベルだろうし。でも良いところに就職するためにはやっぱり良い大学のほうが有利だって話だから、少しでも上のランクの大学を目指そうとは思ってる」

「良いんじゃない。それでも。社会に出ると社交性とか協調性とかが大事な部分でもあるし。大学でただ、お勉強だけやってきて使えない新入社員もいるからね。良い大学イコール良い会社ではないけど選択肢は広がると思うわよ」

姉ちゃんが言うと説得力はあった。達也は元気に

「ハイ、ありがとうございます」

と少しおかしな返事をした。達也も漠然とした不安があるのだろう。

姉ちゃんが次に淳史に聞いた。

「淳史君は？」

淳史はこういうときに自分のことはあまり話さない。俺が助け舟を出そうかと思っていると、少し戸惑いながら言った。

「俺は実は大学より専門学校に行きたいんだ。パソコンとか情報処理は、今は大学より専門学校のほうが充実しているし。でも親とか先生がそんなに道を狭めるなって。正直親はパソコンのことなんかわかってないから、説明しても無駄だと思うし困ってるんだ」

色々考えて納得して進路を決めていると思っていた淳史が意外だった。姉ちゃんは少し考えて「無責任に言う訳じゃないけど、ちゃんと資料を集めてご両親に話してみなさい。それでダメなら、行きたくない大学なんて受けなきゃ良いじゃない。でも大学にしても専門学校にしてもお金を出すのは親なんだから、それだけは忘れたらダメよ。子どもの教育費を払うのは親の責任なんて言うのは、親がいて初めて成立する言葉だからね。親がお金を払ってくれないと仮定して、それでも専門学校に行きたければその熱意を話せばきっとわかってくれると思うわよ」

姉ちゃんの言葉に淳史は少しショックを受けているようにも見えた。しかしやがて何かに納得したようで

「そうですね。ダメなら、自分でバイトして授業料払うくらいの気持ちで、一度話してみます」

淳史が言った。姉ちゃんは当然俺にも聞いてきた。俺には何もなかった。大学で学びたいことも遊びたいというのもない。増してや社会に出て働くのも不安だ。だから「とりあえず進学」なのだ。姉ちゃんは笑って

「直人が一番情けないわね」

と言った。その日の夜はずっと考えていた。みんな答えが出なくてもきちんと考えているのだ。大学に行って一番やりたいことは何か。しかし答えは出なかった。母親は俺にも

「大学に行きなさい。やりたいことが見つかるかもしれないし、見つからなくてもちゃんと大学生としての経験が残るから」

と言ってくれるだろうか。そして父親の言葉が思い出された。

「何をしても、しなくても別に良いけど、最後に誰かの所為にはするなよ」

淳史が大学を選んだとしても、専門学校を選んだとしても、どちらなら後悔しないと今は言えない。もし失敗したと思ったときに自分で決めたからと納得する必要があるはずだ。今の俺にはその選択肢もない。大学に行かないというのは考えたこともなかった。そのくせ大学に行きたいという強い思いもない。俺は甘えているだけなのだろうか。父親の言葉の意味が少しだけわかった気がした。

3日目の朝は、前日に7時半起床と決められたが、目覚まし時計では起きられず、結局姉ちゃんに叩き起こされた。10時ごろには女の子が着く筈なので、それまでに掃除と布団干しを命じられた。やがて時間が近づくと姉ちゃんは車で近くの駅に迎えに行った。達也と淳史はすっかり飼いならされた猫のように従順に従っていることが面白かった。

迎えに出てから約2時間後、姉ちゃんが女の子3人を連れて戻ってきた。

「遅かったね」

俺が出迎えながら言うと、姉ちゃんは

「買い物して来たから。今夜はバーベキューだぞ」

と買い物袋から肉を取り出し見せた。達也が喜んでいる横で高宮と淳史が話をしている。姉ちゃんが出した恋愛禁止令の話をしているのだろうか。すると突然淳史が俺に向かって叫んだ。

「直人！俺たちは真面目に掃除していたのに、4人でかき氷を食べていたらしいぞ」

俺も暑い中、動いて汗だくになっていたので思わず叫んだ。

「姉ちゃんずるいよ」

しかし姉ちゃんは、文句を文句と取っていないようで。

「全くそんなことで大騒ぎして子供ね。ちゃんとアイス買って来たからそれを食べて、お昼が出来るまで休んでなさい」

そう言うと吉田に目で合図をしてアイスを配らせた。我ながら子供っぽいと思いながらもそのアイスは冷たく、とてもおいしく感じ、すっかり誤魔化された。

お昼ご飯を食べた後、姉ちゃんは夕方まで自由時間と決めて車で出掛けてしまった。高宮と淳史は二人で散歩に出掛けてしまい、恋愛禁止の話は、なし崩しを感じさせた。井上と吉田は顔を見合わせどうしようかという表情だ。俺は別にどうでも良かったが、達也も所在無さげで困り顔だったので、掃除のときに見つけた道具で釣りに行こうと提案した。

「面白そう、やってみたい」

吉田は特に乗り気で大はしゃぎでそう言った。しかし実際のところ、俺も釣りはやったことがある程度だったので釣れる気はしなかった。近くの店で必要なものを買って、堤防の上に4人で腰掛け釣り糸を垂らしてみるも、小1時間しても予想通り全く当たりは来なかった。

そして吉田は少し飽きたような口調で俺に言った。

「石井君全然ダメじゃん」

俺も飽きてきたので

「まあ素人4人だし仕様がないう。やめようか？」

と言うと、吉田は止めるのかと思いきや俺の腕を取り

「場所を変えてみようよ、あっちに行ってみよう」

と引っ張った。

達也が少し淋しそうにこっちを見ていたが、井上が何か耳打ちをすると、こっちを見るのをやめた。俺は達也

の一昨日の話を思い出し、少しだけ罪悪感を覚えた。だいたい本当に吉田は俺に好意があるのだろうか。もしそうだとしたら、あまりこの状況は良くないように思えた。俺は吉田のことを何とも思っていないのに誤解されても困るし、やはり達也に申し訳ない。俺はさりげなく聞こえるよう、吉田に言った。

「そういえば合宿中は恋愛禁止なのに、淳史と高宮はどこ行ったんだろうな」

「別に二人で散歩することは、恋愛禁止とは関係ないんじゃないかな？」

吉田の言葉からは、恋愛禁止の話はきちんと伝わっているらしい。確かに恋愛禁止と言ったって感情を殺すことは出来ないのだから、どこまで良くてどこからダメというのではないのかもしれない。告白や愛の言葉は禁止でも、二人で散歩なんて友達でもするだろう。つまり吉田は、達也や井上と少し離れて俺と二人で釣りをすることは恋愛とは違うのよと言っているようにも聞こえ、自分の言葉がやぶ蛇だったと思わせられた。俺はただ

「そうだよな」

と答えるしかなかった。

今回の6人のうち、井上以外はみんな1年生から同じクラスで、井上だけが2年生になってからのクラスメイトである。そういえば井上はどうして今回参加することになったのだろうか。普段高宮や吉田とそれほど仲が良いという感じはしなかった。

兄貴が達也の部の先輩なので1年の時から顔くらいは知っていたが、同じクラスになってからもあまり話した記憶はない。そんなことを考えていると、

「こちら辺で釣ろう」

吉田が声をかけ座った。俺も横に座った。達也たちからは30mくらい離れただろうか。もう向こうの声は聞こえない。見ると二人は二人で楽しそうに話しているようだ。達也が余計なことを言うから、かえって吉田を意識してしまいやりづらかった。何か話さなければ気まずいと思えば思うほど、余計言葉が出てこなかった。そんな俺をお構いなしに吉田は釣りをしていた。たまに他愛のないことを言う以外お互い黙って釣りをした。初めは空気が重い感じもしたが、俺が自意識過剰だったのか、吉田はいつもと同じに見えた。結局場所を変えても成果はなく、あきらめて達也のところに戻ると、名前もわからない小さな魚を見せびらかした。しかしとても食べられそうも無く、結局海へ戻すことにした。

別荘に帰ると姉ちゃんも、淳史と高宮も戻ってきていた。高宮が

「お帰りなさい」

と笑顔で出迎えてくれた。

高宮に魚釣りに行っていたことと、成果がないことを話していると、

「やっぱ、俺がないとダメだな」

高宮の後ろから淳史が言い、みんなを笑わせた。やがて夕食の準備をすることになり、女の子たちが食材を切り、男は庭でバーベキューのセッティングを始めた。俺が一人で炭に火を起こしていると姉ちゃんが庭にやってきて言った。

「どう大丈夫？何だ、まだ点かないの？」

「もうちょっとだよ」

俺が火を点けながら答えると、姉ちゃんは周りに人がいないのを確認してから

「直人は、久美子ちゃんが好きなんだろ？」

と聞いてきた。

誰にも言ったことはなかったが、当たりだった。

入学してからずっと高宮が気になっていた。1年の終わりぐらい、淳史と仲良くなった頃はまだ高宮と淳史が付き合っていることは一部しか知らなくて俺は知らなかったのだ。そしてある日、高宮と付き合っているという噂を聞き、淳史に聞くと「聞かれなかったから」とあっさり認めた。しかしきっかけとか、どこまでの関係とかは、淳史が答えたかどうかは別として、聞くのが恐くて聞けなかった。そして淳史も聞かれたこと以外は話さなかった。最近、高宮は俺たちと一緒に行動する機会が増え、俺としては吹っ切りたいのになかなかそれが出来ず、苦しいのと今まで以上に話が出来て喜んでいる自分とがいて複雑だった。

「何言ってんだよ。淳史の彼女なんだから、そんな訳ないだろう。だいたい合宿中は恋愛禁止ってことは、こういう会話も禁止だろ？」

俺は相変わらず炭に火を点けながら姉ちゃんを見ずに言うと、

「なーんだ、違うのか。でも直人はあの3人の中だったら一番好きなのは久美子ちゃんだよね？ってことは今回、直人が好きな子はいないんだ。つまんないの」

そして少し間をおき、

「直人なら恋愛禁止破っても良いわよ。直人が久美子ちゃんを好きなら、私が淳史くんを誘惑するとか、せっかくチャンスをつくってあげようと思ったのに」

俺を甘やかしているのか、からかっているのかわからなかったが、そう言い残し姉ちゃんは室内に戻っていった。相変わらず俺のことは姉ちゃんに筒抜けらしい。他の奴も薄々感づいているのだろうか。ばれたのは姉ちゃんだけだと思いたい。やがて火が点いた頃淳史と達也が鉄板や台にするブロックを持ってきた。

まさか「俺の好きな人知ってる？」とは聞けない。俺にとって淳史は大切な友達だし、淳史もそう思っているなら、俺が隠してきたように、淳史も気が付いても気が付いていないフリをするだろう。

そう今のまがが一番良いんだと思うことにした。

やがて準備も終わりバーベキューが始まった。俺は吉田に加え、意識し過ぎで高宮の顔も見られなくなっていた。やっとのことで女の子の参加が叶ったのに、女の子が来てからは昨日までの楽しさが半減した気がした。みんなが楽しそうに笑っていることが腹立たしく思え、「俺が合宿を成立させたのに俺が楽しくないのはおかしい」と叫びたい衝動に駆られた。

バーベキューが終わり片付けを終わると、星の観測時間までシャワーを浴びたり、テレビを見たりして過ごした。観測の方法は色々意見が出たが、3時間を45分ずつ区切り、男女ペアで観測し、最後の45分は6人で観測することになった。その間、観測の時間じゃない人は寝ないこと。そして観測するペアは観測に関する以外の私語は禁止と決まった。ペアは井上と俺、吉田と淳史、高宮と達也に決まった。私語禁止とはいえ、今夜は井上とが一番良いと思っていたので助かった。

昨日、一昨日の経験から庭では少し明るいので、別荘から1、2分の所を観測地点にした。今夜の1番手は俺たちに決まった。

45分ずっと上を見ているには辛いということサマーベッドを並べて寝転んで、夜空を眺めることにした。一応流星の観測数ということに絞ったせいか、黙って星を見るという作業は星空に吸い込まれそうで眠りに落ちそうだった。やむを得ず井上に話しかけた。

「やばい。話してないと寝そう」

「私語は禁止だよ。でも石井君とはちょっと話したかったから良いか」

井上は少し笑いながら答えた。今まで井上は口調のせいか、性格がきつそうに思っていたが今日半日で大分イメージが変わった。

「さっき釣りの時、達也と何話してたの？」

眠気覚ましだし、当たり障りのない質問と思い聞いた。

「別にたいした事は話してないよ。山際君が私に何で合宿に参加したのか聞くから、家にいたくないからって答えて。後は何だっけかな。そっちは？」

井上のサバサバした話し方が、逆に気を使わず話せる感じで良かった。

「俺たちは釣りに夢中であまり話さなかったかな。井上は家に居づらいの？まあそれぞれ色々あるよね、じゃあ合宿参加出来て良かったね」

「うん、お姉さんが女の子3人の親に電話くれて、責任持つって話してくれたんだ。良い人だよ、綺麗だし。石井君は私の話したことに余計な詮索をしないね。山際君は心配して色々聞いてくれたけど、聞かないのも優しさだよ」

正直井上の心配をする余裕が今の俺になっただけというせいもあって、自分が誉められたことより、姉ちゃんが誉められたことの方が嬉しかった。それに女の子の両親にまで電話してくれたのだと思うと姉ちゃんの気配りに感謝せずにいられなかった。

「私ね、うちのクラスで一番不幸じゃないかってたまに思うの」

井上は少し淋しそうに話始めた。

「母子家庭で、兄貴が大学行ったから、もう私が進学するお金も無いし、お小遣いも自分でバイトしなくちゃいけないし。勿論もっと不幸な人もたくさんいるのはわかるけど、つい自分の周り比べちゃうんだよね。そのくせバイトじゃない日は家事までやってるんだよ。家になんか居たくないよ」

井上がこういう愚痴を言うとは思わなかったが、それ以上に自分が恵まれた環境だということを感じた。達也にも同じ話をしたのだろうか。俺はただ

「じゃあ合宿楽しもうな」

とだけ言った。井上は

「ごめんね。変な話をして。誰かに愚痴りたかったんだ。山際君みたいに心配してくれる人には重い話になっちゃう気がして言えなくて。もし山際君がまだ気にかけてくれていたら伝えておいて」

そう言って、話題を変えた。最近、音楽は洋楽を聴いているとのことだった。

結局45分の間、話をしている集中して見ていなかったせいか流星は一つも見られなかった。次の組が交代に来たので部屋に戻ると、まだ11時前だというのに姉ちゃんはウトウトしていた。俺は高宮と達也にダメだったと報告した。そして4人でUNOをしていると、やがてタイマーがなると高宮と達也が順番で出て行った。入れ替わりで吉田と淳史が帰ってきた。

「どうだった？」

俺が淳史に聞くと、吉田が興奮しながら答えた。

「1個見えたよ。さすがに願いことは言えなかったけど、すごく感動した」

「俺はわからなかった」

その言葉に続けて淳史は残念そうに言った。

そして話しているうちに時間は経ち、タイマーがなったので4人で観測地点へ行った。行くと達也が気持ち良さそうに寝ていた。そこでみんなでサマーベッドをそっと持ち上げ50mくらい移動させた。そしてタイマーを5分後にセットして耳元に置いて隠れた。そんないたずらをしていると、さっきまでの憂鬱な気分が少し晴れ、高宮に

「見えた？」

と意識せず自然に声を掛けられた。

「達也くんが寝ちゃったのがわかったら、私もウトウトしちゃってダメだった、亜紀は見えたんだってね」

高宮は淳史の影響で俺たちのことを、たまに名前と呼ぶ。そして5分後タイマーがなり達也が飛び起きた。みんなで大爆笑して50m先で手を振ると達也はようやく察したみたいで照れていた。またみんなで手を叩いて笑った。そして片付けをし、みんなで笑いながら別荘に戻り姉ちゃんを起こし就寝となった。布団に入ると時間も遅い所為か特に何も話さず眠りについた。

次の日は予定通り海水浴に行った。車に全員は乗れないので、まず男どもが行き場所を取り、次に女の子が来た。姉ちゃんは

「少し疲れちゃった。後でまた来るね」

と言って車に戻って行った。なんだか気になり車まで走って姉ちゃんに声をかけた。

「どうしたの？昨日も早く寝てたし、ガキのお守に疲れちゃった？」

しかし姉ちゃんは笑顔で

「何でもないよ。直人に心配されるようじゃ私も終わりだね」

と言って、俺の髪をまたクシャクシャにした。しかし何となく気になりそのまま助手席に座ると

「直人のそういう優しさ好きだよ」

と言いながら車を発進させた。しばらく走ると姉ちゃんは話始めた。

「実は私ともあろうものが失恋しちゃって、ちょっと落ち込んでるんだよね。夜中とかも何となく熟睡できなくて」

俺が何も言わないとそのまま続けた。

「同じ会社で不倫だったんだけど、不倫ってわかる？」

俺は頷いた。

「気が付いたら社内で噂になっていてさ。私は別に構わなかったんだけど、相手はビビっちゃって、別れてくれって。今なら単なる噂で片付けられるって。手切れ金で100万くれてさ。こんな奴が好きだったなんて思うと情けなくて、そしてこんな奴に振られるなんてって思ったら無性に惨めで……」

そして少し間をおき

「でも好きだったんだ」

俺は何と言っていいかわからず、ただ

「うん」

と言った。

「でもやっぱり噂が広がり過ぎて、会社にいられない雰囲気になって辞めちゃった。本当にいられないのは奥さんがいる男のはずなのにね。100万と退職金でしばらくは暮らせたんだけど、一人でいるのは淋しくて、直人の家に戻っちゃった。だから今回誘ってくれてすごく嬉しかったよ。ありがとう」

「何言ってんだよ。俺に礼言うなんて姉ちゃんらしくもない」

俺は必死で明るく言った。

「そうだね。でも本当にありがとう。直人に話したら少しスッキリした。よし泳ごう！」

そう言うと車をまた海水浴場に向かわせた。

「アイス買って来たよ」

戻る途中に買ったアイスを見せると、みんなは姉ちゃんが戻ったことより、アイスに反応し大はしゃぎだった。ただ一人高宮を除いては。明らかに高宮の様子がおかしかった。最近のキャピキャピキャラが鳴りを潜めていた。

どうしたのか聞こうか悩んでいると突然高宮が

「直人くん泳ごう」

と誘ってきた。淳史の顔を見たが、顎で行ってこいと合図をされ浮き輪を持って海に入った。海に入ると俺はすぐ聞いた。

「淳史となんかあった？」

高宮の目には涙が見えた。

「高宮？」

俺が言うと、高宮は言った。

「あっくんが昨日の散歩のときに、少し距離をおこうって……。考えておいてくれって……。で、さっき聞いたら帰ったら返事をくれって。私の何がいけなかったんだろう？」

突然の話で戸惑った。淳史はいつも自分からはあまり喋らない。

「後で聞いてみるよ。多分淳史には高宮が眩しすぎて勉強に集中できないとかだよ」

違うのはわかっていた。そう本当は俺にとって眩しいだけなのだ。でも高宮は言った。

「ありがとう。直人くんは好きな人いないの？応援するよ」

と聞いてきた。優しい言葉だが俺には残酷な言葉だった。

「今はいない」

そう言うと、高宮は笑顔になっていて言った。

「いつでも言ってね。絶対応援するから」

そしてそのまましばらく二人で遊んでいたが、心に霧がかかったようで、楽しめなかった。高宮とは淳史がいるからこそ、こうやって遊べるのだ。でも、もし淳史と高宮が別れたらこの関係はどうなるのだろうか？ただのクラスメイトに戻るのか、それとも付き合うとは言わなくても、今のように色々話せる友達としての関係を続けられるのか。そして俺はどういう状況を望んでいるのか。そんな打算的な考えをしている自分に気が付き自己嫌悪に落ちた。

30分ほどして岸に上がったが、何となく淳史の顔が見られなかった。淳史と俺、淳史と高宮が話さないで全員で盛り上がるという状況にならず、みんな雰囲気を感じたのか何となくギクシャクしていた。

そしてお昼を食べた後、女の子は先に帰ることになり姉ちゃんが送っていった。

「じゃあ直人、3時ごろ迎えに来るからナンパなんかするんじゃないよ」

そう言い残した姉ちゃんは、事態を高宮から聞いて知っているようだった。こんな状態ではこの合宿は失敗だったと思わずにいられなかった。淳史はなんでわざわざこのタイミングで言ったのだろう。せっかくの合宿を台無しにする淳史が恨めしかった。

姉ちゃんが車で出発したのを目で確認した後、意を決し言った。

「淳史、高宮と何かあったのか？」

俺はなるべくさりげなく言ったつもりだったが、明らかに会話の流れはおかしかった。淳史は、俺と高宮が海と一緒にいった事で察しているようだった。しかしいつものようにポーカーフェイスで言った。

「なんかあいつ最近まとわりついて鬱陶しいんだよ。昨日だって合宿中は恋愛禁止だって言ってるのに散歩しようとか言ってさ。俺はお姉さんみたいな大人の女性が良いのに。久美子はかわい子ぶってばかりで。あいつと付き合ったのだからクールな優等生に見えたからなのになのがっかりだよ」

淳史のまくし立てる言葉に無性に腹が立った。あまりにも言い分が勝手過ぎる。もっと高宮の気持ちを考えてやれよ。高宮が可哀想じゃないか。そう言いたかったが、「お前には関係ない」と話してくれないことを考えれば、会話を成立させることが重要だった。そう俺に言う権利があるとすれば、恋愛禁止のこの合宿で言うべきではないと言う事位なのだ。それならば、淳史は友達として俺に話してくれたのだから、俺も友達として意見を言わなくてはいけないのだろう。感情を抑えて俺は言った。

「じゃあ、それをきちんと高宮に言ってみたら良いんじゃないか。高宮は頭の良い子だからきっとわかると思うよ」

達也は何も言わず顔にタオルを乗せ寝ていたが、多分起きているだろう。淳史は俺の言葉に何も言い返さず、ただ

「そうだな」

とだけ答えた。合宿なんか企画しなければ良かった。そうすれば高宮とも吉田とも、そして淳史とまでギクシャクすることはなかったのだ。達也とだって吉田のことで随分気を使うことになっている。達也は本当に寝ているのか一言も喋らなかった。

その後約1時間、姉ちゃんが迎えに来るまでほとんど喋らず浜辺で寝転んでいた。いつもなら水着の女の子を見て、どれが良いとか言っても良いはずなのに。達也が時折起き上がって

「なんかこうしていると受験生だってことを忘れるな」

などと言ってくれることで、息が詰まるような雰囲気にはまではならなかったのが救いだった。そしてそれは姉ちゃんの車の中でも変わることはなかった。事態を知っていると思われる姉ちゃんも、口を出すべきではないと思ったのか、あるいはどうしようもないと思ったのか、何も言わなかった。

別荘に戻ると女の子は勉強をしていた。

「おかえりなさい」

という言葉が聞こえたが、顔は上げず俺たちもまたそのまま風呂場に向かいシャワーを浴びた。背中が赤くなっていて、ぬるま湯でもヒリヒリした。

晩ご飯は手巻き寿司だったが、ほとんど味はわからなかった。重々しい雰囲気になるのを辛うじて姉ちゃんが均衡を保ち、みんな表面上は何もないように繕っていた。しかし会話は必要最小限しかせず、違和感がたち込めていた。

このままではどうしようもないと感じたのだろう。姉ちゃんの提案で晩ご飯の片付けを賭け、トランプをやることになった。

「片付けだけじゃつまらないから懺悔もプラスしましょう。懺悔は何でも良いわ。万引きしたことがあるとか、親に嘘をついたことがあるとか。私も負けたら言うし。その代わりルールとして今日の懺悔は言った方も聞いたほうも今夜限りで忘れること。もしみんなに許されたら片付けは免除ね」

そして冷蔵庫から缶ビールと甘い缶サワーを持ってきて、

「もしシラフで懺悔なんか出来ないっていうなら、今日は飲んでも良いわよ。私が飲もうと思ってさっき買ってきたの。ただし一人1本までだからね」

テーブル真ん中に缶を置きながらみんなに言った。本数からも一人で飲める量ではなかった。そして自分で缶ビールを1本手に取った。とりあえず俺もビールを手にとると、淳史もグレープフルーツサワーを取った。結局達也がビール、井上が桃のお酒、吉田がカルピスサワー、最後までお酒を飲むか悩んでいたように見えた高宮はビールを取った。

「じゃあ、まず乾杯ね。カンパーイ！」

みんなが一斉に一口飲んだ。

「苦ーい」

と高宮が言うとみんなが吹き出した。すると淳史が

「酒なんか飲んだことないのに無理するなよ」

とビールを取り上げた。高宮は少しシュンとしたように見えた。すると今度は自分の持っていたサワーを渡しながら言った。

「これならビールよりは飲みやすいと思うよ」

「ありがとう」

高宮はお礼を言って一口飲んだ後

「でもやっぱり美味しくないね」

と言ったので、またみんなで笑った。

そしてトランプが始まった。最初に負けたのは達也だった。

「えっと、俺は小学生の頃好きだった女の子の上履きを隠して泣かしてしまいました。しかもそのあと先生に見つかって何でやったのかと聞かれて、嫌いだからと言ってしまいました。お許してください」

「その子の名前は？」

井上が聞いた。

「由美子ちゃんだったかな」

みんなが拍手をしながら

「許しまーす」

と言った。酒の力なのか、トランプのせいかわが大分和んでいた。どちらにしても姉ちゃんの作戦勝ちだ。姉ちゃんを見ると俺にそっとウインクをした。そして

「じゃあ私はもう1本飲もうかな。ここに来てから3日もお酒飲まなかったから」と言って立ち上がると、淳史がツッコミを入れた。

「なんだ、自分が飲みたいだけだったんでしょ？」

しかし、淳史も含めみんな姉ちゃんの優しさがわかっていた。特に淳史はこの空気を作った張本人なのだ。本気で言っている訳がない。姉ちゃんは自分のビールと缶紅茶を持ってきて紅茶を高宮に渡した。そしてまだ大分残っていると思われるサワーの缶を取り一気に飲み干した。高宮は自分だけソフトドリンクで良いのかなと思っているようで淳史の顔を見た。淳史は優しく頷いていた。

ゲームは次に吉田が負けた。酔っているのか顔は大分赤かった。少し間を空けた後、吉田は何かを決意したのか話し始めた。

「私は今回、好きな人に告白しようと不純な理由で参加しました。しかも、お姉さんの恋愛禁止令の話が出た後もです。だけどその恋愛禁止令の意味がやっとわかったから反省し懺悔します」

告白の対象は俺の可能性が高く、俺は焦って吉田から目をそらした。しかし他の奴らは誰も俺を見ず吉田を見ていた。多分女の子は吉田から聞いているだろうし、みんな相手が誰かもわかっているのだ。俺以外誰もこの懺悔を意に介してないようだった。達也が聞いた。

「その人がいなかったら合宿には参加しなかった？」

吉田は少し考えた後に言った。

「参加したかはわからないけど、こういう気持ちで参加するよりはきっともっと楽しめたとは思おう」

やがて拍手と共に

「許しまーす」

と口々に言った。俺も最後に言った。

後は姉ちゃんの思惑としては淳史に懺悔させたいのだろうなと思った。観測までの時間を逆算すると、あと1回くらいしかゲームは出来ない。しかし姉ちゃんは意外にも

「じゃあトランプは終わり。片付けはみんなが観測している間に私がやるからいいわ。続いて今夜の観測のくじ引きをします。女の子はハートの絵札、男の子はスペードの絵札を1枚とって私に渡してね」

そして裏返したトランプを選び、姉ちゃんに渡した。

「発表します。今夜の組み合わせは最初が淳史さんと久美子ちゃん。次が直人と亜紀ちゃん。最後は達也さんと咲ちゃんね」

明らかに嘘だと思ったが、誰も文句は言わなかった。みんな言い出せなかっただけでこうなることを望んでいたのだ。

「じゃあお酒の時間も終わりね。残っているお酒は没収です」

片付けながら言う姉ちゃんに、

「えーっ。ゆっくり飲んでたのに」

と達也が形だけの文句を言ったが、みんなお酒なんて大人ぶりだけで美味しいとは思ってなかったから従った。すると姉ちゃんが

「あっ！花火買ったの忘れてた」

と叫んだ。俺は

「何だよ、姉ちゃん。早く言ってくれよ。みんな急いで仕度しようぜ」

と言いながら、多分とても不恰好なウインクを姉ちゃんにした。

そしてみんなで花火をした。その時間はとても暖かい気持ちになる時間となった。小学生の頃は線香花火なんかつまらないと思ったのに、今は情緒があるように感じる。姉ちゃんはどこまで計算でどこから天然なのだろうか。何もかもタイミングは抜群に思えた。

淳史と高宮はみんなから少し離れた所で線香花火をしていた。どうやら仲直りをしたようだった。多分きちんと話しをしたのか、しなくても何かが伝わったのだろう。考えてみればみんなの前で淳史を謝らせても、高宮だって喜ぶわけがない。懺悔ゲームは無言のプレッシャーというやつか。それが功を奏したのは明らかだった。淳史が負けていたらどうなったのか少し意地悪な考えが頭をよぎったが、きっと姉ちゃんが何とかしたのだろう。

そんな二人をよそに達也は花火を振り回したり、ねずみ花火を投げたりして吉田と井上をかからかっていた。俺が一人で針金線香花火をしながらみんなを見ていると、横に姉ちゃんが来て言った。

「直人、高校生も色々大変だね」

「でも多分大人ほどじゃないよ」

姉ちゃんの言っている深い部分の意味はわからなかったが俺は言った。

姉ちゃんは笑いながら少し酒臭い口で頬っぺたにキスをしようとした。俺が逃げようとしたとき、達也が見ていたらしく叫んだ。

「あーっ。逃げるなら俺と代われ」

その言葉に姉ちゃんは投げキスをしながら言った。

「達也くんには恋愛感情があるから、合宿が終わったらね」

達也は照れながらまた吉田たちとはしゃいでいる。俺は言った。

「姉ちゃんは大丈夫なの？俺たちほど単純じゃないんだろ？」

姉ちゃんは笑いながら、

「男がみんな直人みたいだったら女は泣かないのにね」

そして小さな声で

「10年後私がまだ独身だったら、直人がお嫁にもらってね」

そう言って、吉田と井上の方に歩いていった。

花火を片付けて、予定より少し遅れて観測を始めた。昨日の教訓から今夜はサマーベッド無しになった。淳史と高宮が手を繋いで出発したが姉ちゃんは見ても見ぬフリをした。待っている間に姉ちゃんと吉田と井上が晩ご飯の後片付けを済ませ、俺と達也はテレビを見ていた。しばらくしてタイマーがなり、次の時間となり俺は吉田と観測地点に行った。

吉田が流れ星を見えたか聞くと、淳史が高宮に言った。

「見えたよ。それも3個も。な？」

高宮は俺に言った。

「うん。流れ星のおかげであっくんとも仲直りできたみたい」

暗闇のなかで高宮の笑顔はいつも以上に輝いていた。

「じゃあがんばれよ」

淳史は吉田に言ったのか俺に言ったのか、そして何をがんばるのか良くわからない言葉を残し高宮と戻っていった。

「本当に見えたのかな？」

俺の言葉に、吉田は空に集中して聞こえないのか何も答えなかった。空を見上げ間もなく本当に流星が見えた。

「あっ！」

俺が声を出すと吉田は

「見たよ」

と嬉しそうに言った。そして自然な感じで続けた。

「さっき言った私の好きな人は石井君だよ」

「うん、何となくわかってた」

俺は答えた。綺麗な星空を見ているせいか、相手の顔を見ていないからか素直になれる気がした。

「石井君、誤解しないで欲しいんだけど、これは告白じゃなくて報告。久美子たちを見ていたら、私はまだ男の人と付き合うなんて無理だとわかったし、それに石井君のことは一番好きだけど多分恋に恋しているだけだと思うの。だからこれは告白じゃないから今までと同じように友達でいてね」

そうは言っても、それが多分無理だと吉田はわかっているのだろう。それでも言う吉田に無理だとは言えなかった。いや実際俺は友達としてやっていける気がしていた。そして吉田の正直さに好感を覚えていた。

「うん。当たり前じゃないか」

俺が言うと、

「ありがとう」

吉田は言いながら、手を出し握手を求めてきた。俺は顔を見ないまま握手をした。そしてそのまま手の握りを変え、手をつないだまま空を見た。満天の星が見える夜空は、プラネタリウムで見る星よりも綺麗に見え感動した。こうやって手を繋いで星を見ているせいか、吉田と付き合うのも悪くないかなと思えていた。

「吉田？」

「なに？」

吉田は自然な感じで答えた。吉田の正直さに俺もバカ正直で応えて良いものかわからなかったが、器用ではない自分にはそれが最善に思えた。

「俺、誰にも言ったことがなかったことを吉田にだけ打ち明けるよ」

空を見続けていたので吉田の表情はわからなかったけど、手が少しこわばるのがわかった。

「本当にこれは淳史も知らないんだけど、俺1年の時から、そして多分今でも高宮のことが好きなんだ」

吉田は

「うん」

とだけ言った。

「でも今日の昼間、淳史と高宮が別れるかもしれないって聞いたとき、色んなことを考えたけど高宮のために何かをしてあげたいという気持ちが一番強かったんだ」

「なんとなくその気持ちわかる気がする」

吉田の言葉は本当にそう思ってくれているように聞こえた。

「俺の高宮を好きという気持ちは、多分芸能人を好きというのと同じ感じなんだと思う。俺はきっと高宮のファンなだけで恋愛感情とは違うような気がしてきたんだ。だから・・・」

そこまで言ったとき

「あっ」

吉田が叫んだ。そして

「見た？」

と聞いた。さっきより少し大きめの流星が俺にも見えた。

「うん」

俺が返事をすると、

「さっき話の途中だったね。ごめんね」

吉田が言った。本当は今度デートしてみようかと言おうと思ったのだが、何となくタイミングを逸した気がしたので

「吉田は進路どうするの？」

と代わりに聞いた。

「うん久美子と一緒にのところに行けたら良いねって、色々話しているけどなかなかね。私は久美子ほど頭が良くないから、推薦も厳しいし。英文科の短大に行きたいとは思っているけど、まだわからない。石井君は？」

「俺は何も決めてないんだ。今の選択の授業だってそれほど深く考えて選ばなかったし。一応法学部か経済学部のつもりだけど、そろそろ決めなくちゃな」

「そうだね」

何となくでも、自分の中で少しだけ前を向いて考え始めている気がした。みんな悩んでいるのだ。淳史も達也もそして井上也吉田も。不安なのは自分だけじゃない。

社会への不満や不安を口にしても何も変わらないことはみんなわかっているのだ。世の中に飲み込まれる必要はない。でも逃げることも出来ないのだ。

いつの間にか時間になり達也と井上がやって来た。

「なんだよ、お前等、手なんか繋いで。恋愛禁止だぞ」

達也が少し嬉しそうに言った。今なら達也が吉田を応援したいと言った気持ちがわかる気がした。

「ああ、これは流星が見えるようにおまじない」

俺がその場の適当な思いつきでごまかすと、吉田も

「そうだよ。おかげで2個も見えたよ」

と合わせてくれた。

「俺たちも手繋いでみようぜ」

達也はそう言って井上に手を出した。井上は笑って

「良いけど私の手は高いよ。駅前の新しい喫茶店でパフェ奢ってね」

などと言っている。

それを横目で見ながら俺と吉田は別荘に戻った。戻る途中、俺は吉田をすぐにではないが好きになる予感を感じた。まあその時まで吉田が俺のことを好きでいてくれるかはわからないけど、自然の成り行きに任せようと思った。

「サチと山際君良い感じだったね」

吉田の言葉に思わず

「ああ。でもあいつらから見たら俺たちもそう見えたかもな」

と言ってしまった。吉田は

「うん」

と言いながら、嬉しそうだった。1、2分程の帰り道を、3、4分かけてゆっくり帰った。

別荘に着くと淳史と高宮に報告をした。そしてみんなでテレビを見ているとタイマーがなり、いよいよ最後の45分になった。姉ちゃんも参加するというので5人で観測地点に行くと達也が興奮して

「1個だけ見えたよ。おまじないのおかげかな」

と言ったので、淳史が聞いてきた

「なんだよおまじないって」

俺がどうしようと思っていると吉田が答えた。

「手を繋ぐの。みんなでやろう」

そしてみんなで手を繋ぐことになった。俺の横は姉ちゃんと高宮だった。いつの間にか輪になって空を見上げる格好になってしまい、姉ちゃんが

「UFOでも呼んでいるみたいだね」

と言ったのでみんなで笑った。でも今夜ならUFOでも宇宙人でも信じられる気持ちだった。二人きりではないにしろ、こうして高宮と手をつないで星を見ていること自体この合宿がなければ有り得なかつただろう。単純なのだろうけど今はどんな奇跡も信じられる気分だった。

10分ほどして、本当に奇跡はおきた。みんな一斉に

「あっ！」

と言った。誰の目にもわかる大きな流れ星だった。みんなで過ごす最後の夜に、みんなで一つの流星を見ることが出来た。

色々あったけどこの瞬間のこの感動だけでも合宿をやった甲斐があったと思えた。誰もが次の言葉を失っていた。2、3分して

「よーし、今夜は徹夜で遊ぶぞ」

突然姉ちゃんが言い出した。

しかしその突然の言葉にも不思議にみんなの返事があった。

「おーっ」

みんなで最後の観測記録を書いて、急いで片づけをした。この余韻が醒めないことを誰もが願った。別荘に帰りUNOを始めたが1時間もしないうちに言い出しっぺの姉ちゃんが寝てしまった。そうしてやがて一人また一人と横になり、結局みな寝室には行かずそのまま居間でザコ寝の形になったしまった。多少さっき飲んだお酒が効いているのかもしれない。気がつくと俺以外はみんな寝てしまっていた。

しかし俺は何となく寝られなくて、部屋から出て縁側に座って星を見ていた。すると間もなく、さっきまで寝ていたはずの達也がビールを2本持って横に座った。そして1本を俺に手渡ししながら言った。

「直人、吉田と上手くいきそうなのか？」

達也の言い方は嫉妬からではなく、そうなって欲しいのだと感じた。

「まだわからないけど、どうなっても達也が気にしなくて良いからな」

俺の言葉に達也は、俺たちが付き合うと決めているようで

「何言ってるんだよ。上手くいったら俺のおかげだよ」

笑って達也が言ったので、

「そうだな」

と俺も笑った。そして今度は俺が聞いた

「井上とさっき良い感じだったな」

達也は少しバツが悪そうに言った

「俺、惚れっぽいのもかもしれないけど、多分井上のことを好きになったと思う」

「そうか。でも別に良いんじゃないか。二股とかかけなければ」

俺が言うと、達也は照れながら

「そうだよな。今度は例えダメでも帰ったらちゃんと告白してみようと思う」

そう言いながら立ち上がり、

「もう寝るわ。おやすみ」

と言い残し部屋に戻って行った。ビールはそのまま2本とも開けないで置いてあった。俺が聞かなくても、達也は初めから井上のことを言いに来たのだと感じた。思いとか気持ちは口にすることで時には大きくなることもある。達也なりに吉田を吹っ切ろうとしているのかもしれない。もしかしたら単に俺が吉田と付き合うのをためらわないように、気を使っただけなのか。

達也がいなくなっても、まだ眠くならないので達也が置いていったビールを1本開けて一口飲んだ。やはり美味しいとは思わなかったがもう一口飲んだ。当分お酒はいらなないなと思った。姉ちゃんが昔言ったとおり自分でバイトでもするようになったら、また飲もう。

しばらくしてビールを飲み終えた頃、高宮が部屋から出てきた。一瞬酔っ払って幻を見ているのかと思うくらい不思議な感じだった。

「トイレに起きたら直人君が見えたから。何してるの？」

「いや別に。何となく眠くなくてさ。さっきの流れ星の余韻に浸りながらビールを飲んでた」俺の言葉が終わらないうちに高宮は横に座っていた。高宮の腕が俺の腕に少しだけ当たった。酔っているのか顔が熱くなっているのを感じた。

「そうなんだ。確かに感動したよね。正直観測なんてついでというか、仕方なくやるつもりだったけど観測やって良かったって思うもんね」

高宮と二人だけで、こうして話すのは初めてな気がした。そのせいか高宮の夜空を見る横顔を見ていると、夢を見ているような不思議な感覚が抜けなかった。

「少し酔ったかな」

現実なのか夢をみているのか、もしかしたらその境目にいるのかもかもしれない。しかし高宮はいつもと変わらない感じで

「ねえ、何でビールなんて苦いものを大人は喜んで飲むんだろう。直人君は美味しい？」

高宮のさっきのビールを飲んだ時の顔を思い出した。

「正直良くわからないけど、背伸びをしたい年頃だから」

笑って言うと高宮も笑って言った。

「みんなそういう年頃なのかな。あっくんにも、もう少し大人らしく振舞えって怒られちゃった」

怒られたわりには、高宮は嬉しそうだった。その言葉と笑顔に大分現実だと認識出来てきた気がした。

「そっか。淳史でも背伸びして大人みたいに振舞いたいのかな。俺は淳史と一緒にいるときのキャピキャピの高宮も好きだけどな」

そうなのだ。好きになった頃は別として、今の俺は淳史と一緒にいる幸せそうな高宮が好きなのだ。言葉の奥のそんな俺の気持ちを知らず高宮は言った。

「ありがとう。でも今回お姉さんにいっぱい迷惑かけちゃったし、がんばって大人にならなくっちゃって少しだけ思ったよ。今までは高校を卒業してあっくんや直人君と離れ離れになるのが嫌で、ずっとこのまま高校3年生だったら良いのって考えていた。大人のフリをすると早く時間が流れそうで。年月の流れは止められないのにね」

時が経つということと、大人になるということがイコールなのだろうか。

でも大人になるってどういうことだろう。俺にはわからなかったが、高宮もそのようで、そのまま話を続けた。

「どうなったら大人なんだろうね。20歳が大人なら急ぐとかゆっくりは関係なく2、3年後にはみんな大人になるでしょ？」

高宮の3年後か。想像も出来なかった。

きっと高宮なら今よりももっと魅力的な女性になっているのだろう。俺の3年後は何をしているのだろうか。

「そういう意味では俺は逆かも。早く周りから子供扱いされないよう時間が経って欲しかった。でも今回のこの合宿でそうでもなくなった。今だって淳史みたいに将来のことをきちんと考えられないし、大人になる自信がない。大学だって何となく進学志望で出しているけど、それほど大学に行って勉強したいと思っている訳じゃない。たかが3年後なのに20歳の自分なんて想像もつかないよ」

そうなのだ。早く大人になって色々なことをしてみたかったのに、この合宿で気まずいこともあったけど、こういうことが輝いて見えるのは今だけだと気が付けたのだ。そして大人の悩みを抱える姉ちゃんの悲しそうな顔が浮かんだ。高宮は俺の言葉に対し言った。

「きっと歳は関係ないんだよね。勿論運転免許やお酒みたいに年齢の制限があることもあるけど。18歳で働いている人と、25歳ぐらいで学生の人とどっちが大人か何て答えはないものね」

そして少し間をおき続けた。

「サチはね、就職するんだって。小学生の頃、高校生はすごく大人に見えたのにね。大学生の男の人はおじさんだった」

高宮は笑って言った。俺も姉ちゃんが家に住むと決まった時、すごく大人の人が一緒に住むのだと思ったものだ。

「そうだよな。就職して働くのが偉いとか、親のすねをかじって勉強をするのが悪いとかって事とはまた違う問題だよな」

俺は少し考えてから言った。井上が就職することを聞いていることは言わなかった。

高宮は自分に言い聞かせるように

「大人と子供の本当の境界線ってどこにあるんだろうね」

と言った。

「渡辺美里の歌に」

俺はそう言った後に小さな声で歌った。

小さな少女 大きな夢
一面広がる 麦畑
鉄橋の下でK i s sをした
太陽は今よりも 近くに感じていた
いつの日か大人になると
ステキなことは もっとステキに
動きだすと 思っていた (作詞 渡辺美里「ムーンライト・ダンス」)

「というのがあって、俺はこの歌の歌詞の意味が今日やっとわかった気がしたんだ。多分だけど今輝いて見えることと、10年後に輝いて見えることは違うんだよな。そんなこと本当は知っていたのかもしれないけど、気がつかないフリをしていたんだ。子どもの頃すごく大事にしていたおもちゃが今どこにあるのか、捨てたのかもわからない。つまりそういうことだよな」

淳史の影響で高宮も渡辺美里を聞いているのだろう。今度は高宮が歌いだした。

大きくなったら どんな大人になるの
周りの人にいつも聞かれたけれど
時の速さに ついてゆけずに
夢だけが両手から こぼれおちたよ
あれから10年も この先10年も
行きづまり うずくまり かけずりまわり
この街に この朝に この掌に
大切なものは何か 今も見つけれないよ (作詞 渡辺美里「10years」)

そして高宮は俺を見て微笑んだ。

「あっくんに聞いたよ。私に『ちゃんと思ってること言え』って言ってくれたんだってね。ありがとう。私には今はあっくんが一番大切なものかな。直人君も大切なものが早く見つかるといいね。将来のことなんか、あっくんもそうだし、みんなそんなに深く考えていないよ。私も短大か4大か看護学校かまだ悩んでいるんだ。良いんじゃないかな、はっきりと将来が見えなくても。なんとなくでも大学に行こうと思うなら、何もしないよりは良いと思うよ」

高宮の言葉に少しだけ救われた気がした。いつの間にか空が白んできていた。魔法の時間はもうすぐ終わる。高宮とこうして二人だけで、お互いのことをゆっくり話す最初で最後の時間。

「寝そびれちゃったな」

俺が高宮の言葉に答えずにそう言うと、高宮は

「そうだね」

とだけ答えた。そして

「色々あったけど、来て良かったね。来年またみんなで来られたら良いね」

高宮の言葉に、ついさっきまで合宿に来たことを後悔していたのを思い出した。あと数時間で女の子たちは帰ってしまうのだ。せっかく良い雰囲気に戻ったというのに。

「来年か。俺は大学生になっているのかな」

俺は高宮の質問には答えず言った。もうこのメンバーで来るのは難しいだろう。同窓会やちょっと集まって飯を食べるのとは違うのだ。そんなのは来る前からわかっていたことである。だからこそ高校生最後の思い出作りにと企画したのだ。かけがえのない仲間だと思っている淳史や達也と。そして高宮とも卒業してからどういう友達付き合いをするかなんて考えたこともなかった。高宮はさっき「私は高校を卒業してあっくんや直人君と離れ離れになるのが嫌だ」と言っていた。高宮はちゃんと考えているのだ。今は会いたいとか会いたくないに関わらず学校に行けば顔を合わす。卒業したら偶然もなくはないだろうが、明確な意思がないと会わなくなるのだろう。

結局のところは1年後のことさえ誰にもわからないのである。高宮は笑って言った。

「直人君が大学生か。想像できないね」

俺も笑って言った。

「高宮のナース姿だって想像できないよ」

部屋に戻ると電気をつけたまま、みんなでそのままザコ寝をしていた。まだみんな起きないようなので、高宮は淳史の横で、俺も姉ちゃんの横で少し眠ることにした。

「直人、起きなさい。もう10時だよ」

姉ちゃんの声で起きるとみんなもう起きていた。

「何だよ。徹夜とか言って最初に寝たくせに」

俺が文句を言うと、

「男がつまらないことをウジウジ言わない。最後の買い物行って来るからね。お昼ご飯食べたら女の子は帰るから仲良くしてなさいね」

そう言ってあしらわれ、出掛けてしまった。淳史と高宮は仲直りしたのはわかるがベツタリだ。吉田が

「コーヒーか紅茶でも飲む？」

と聞いてきたが、今日も暑そうだったので断った。

「みんなで散歩でもしようか？」

俺が吉田に言うと後ろで淳史が

「達也と井上は二人で1時間くらい前に行っちゃったよ」

と言った。吉田と二人で散歩に行く気がせず、俺だけが昨夜の全ての魔法から解けていることに気がついた。解けたのは朝が来たからか、高宮と話をしたからか。

「じゃあ姉ちゃんが帰ってくる前に少し片付けでもするか」

俺が言うと高宮が

「そうだね」

と言って立ち上がり、それにつられてみんなで昨夜の片づけを始めた。1時間ほどで姉ちゃんが帰ってきたときには達也たちも帰ってきていて、みんなでランチを食べた。

「良いなあ。私ももう一泊したい」

帰りたくなさそうに高宮が言った。井上も吉田も帰りたくなさそうだった。しかし姉ちゃんの立場からそれは無理だった。

食べ終わるとみんなで記念撮影をし、女の子たちは帰って行った。姉ちゃんも駅まで送っていくのでいなくなると、男3人の別荘は妙にガランとしていた。

「俺たちも明日は帰るんだな」

達也が気の抜けた声で言った。過ぎてしまえばもう5日目なのが信じられなかった。

「掃除しなくちゃな」

俺も気の抜けた感じ丸出しで言うと、

「明日の午前中にやれば良いよ。お姉さんが帰ってきたら泳ぎに行こうぜ」

一番そういうことにきちんとしている淳史が言うので、余計に合宿が終わる寂しさを感じさせた。しかし俺も達也もそれに反対する理由はなかった。姉ちゃんが帰ってくると説得をし、もうあと2時間ぐらいしか泳げないだろう海へと向かった。この夏最後の海に別れを告げに。

晩ご飯を食べた後の、その日の観測はやらなかった。だいたい何で4日も真面目に観測したかも不思議ではあった。ただまだ8時前である。

「最後の夜だし、何かして遊ぼうぜ」

達也はそう言うものの気が抜けているのは、明白だった。

「麻雀牌でも持ってくれば良かったな」

俺が言うと、淳史は

「俺、麻雀できねーよ」

と言った。横で聞いていた姉ちゃんが言った。

「もう今日は保護者しないから、残っているお酒飲むなり好きなことして良いよ。私が邪魔なら部屋に行くなり、出掛けるなりするし」

「いやお酒はもういいや」

俺が言うと、達也はかばんからタバコを出して火をつけた。しかし

「お姉さんはここに居てくださいね」

と言ったので、俺はホッとした。この合宿は姉ちゃんおかげで成立したのに最後に仲間はずれにしたら罰が当たるというものだ。

「俺、お姉さんにお酌しようかな」

淳史はそう言うのと冷蔵庫からビールとグラスを持ってきた。俺は達也と淳史が姉ちゃんを邪魔者にしなかったことが何より嬉しかった。そしてラジカセにテープを入れいつも家で聴くよりは音量を上げBGMにした。だらだらと12時頃まで色々な話をして、やがて就寝となった。

最後の夜、男3人で話したい気もしたが、女の子の寝室8畳、男の寝室6畳という状況から暑苦しいから寝室を分けようということになり、仕方なく俺と姉ちゃんが同じ部屋で寝ることになった。そして何年かぶりに布団を二つ並べて敷き電気を消した。

「直人が小学生の頃は、たまに同じ部屋で寝たことあったね」

姉ちゃんは少し懐かしそうに言った。

「そうだっけ？」

少し気恥ずかしくて憶えていないフリをしたが、当然ばれていた。

「何憶えていないフリをしてるの？私の布団にまで入ってきたくせに。なんなら今夜も来てもいいわよ」

姉ちゃんはタオルケットを少し持ち上げ言った。俺は恥ずかしさを誤魔化すために

「馬鹿言うなよ」

と少し怒った口調で言った。そんな俺を姉ちゃんは気にせず言った。

「直人は大体のことは私に話してくれたけど、恋愛の話だけはほとんどしなかったね。直人の初恋ってどういう子だったの？」

俺は言うか迷ったが、時効だと思い正直に言った。

「多分だけど姉ちゃんだよ。小学校4、5年の頃に初めて女性として意識したから」

どういう言葉が返ってくるか、すごく長い時間がかかった気がした。しかし姉ちゃんは姉ちゃんだった。

「直人、私をそんないやらしい目で見てたの？」

ちゃんと冗談で場が煮詰まらないようにしてくれた。

「嘘よ。ありがとう。だからお風呂も1回しか一緒に入ってくれなかったんだ。叔母さんとは入っていたのにね。私あの時、直人に嫌われていると思ってショックだったんだぞ」

姉ちゃん言葉に少し胸が痛んだ。

「俺が断ったとき姉ちゃんが少し悲しそうだったのは、俺も憶えているよ。ただ恥ずかしくてさ」

俺の言葉に姉ちゃんは満足したようだった。そして今度は俺が質問した。

「たまにいなかったけど、どこに行ってたの？」

「ああ。1回は前の彼氏に電話をかけに行っ、一昨日はこっちに会いに来たから話をしに行っただ」

「仲直りしたの？」

「逆。こじれちゃってね。妊娠しているかもしれなくて・・・」

妊娠？よくわからないが、もしそうなら海に入ったりお酒を飲んだりしたらいけないのではないだろうか？

「どうするの？」

「まだ病院に行っていないから、ちゃんとわかった訳じゃないけどね。勿論、墜ろすよ。一人じゃ育てられないしね」

自分が何も出来ない子供だということを強く痛感せずにいられなかった。

「だからもう少し金を巻き上げてやろうと思って、呼び出したんだ。墜ろすとなれば同意書とかも必要だしね。向こうも地元で会うより良いだろうと思ってね」

姉ちゃんが明るく言うのが返って痛々しかった。

「でも信じてもらえなくて、ちゃんと避妊したとか言ってさ」

何が大切で何を守るべきかわからないけど、今の姉ちゃんを誰かが守ってあげなきゃとは思った。でも今の自分には何も出来ない。

「昨日姉ちゃん『10年後独身だったらお嫁にもらってね』って言ったでしょ？いいよ5年後とかでも。従姉弟は結婚できるんだってね。姉ちゃんなら俺の初恋の相手だし、いいよ」

そう言うと、笑いながら、でも少し強い口調で

「直人のそういう優しさ、私は好きだけど、最後まで責任が持てないのにその場だけの優しさは気を付けないとダメだよ。人によっては中途半端な優しさで傷つくことがあることも憶えておいてね」

と言った。

俺は本気だよと言いたかったが言えなかった。姉ちゃんにはまだ俺は子供過ぎるのだ。多分本気だと言っても5歳児が母親と結婚すると言うのと同じぐらいにしか聞こえないのだろう。

「でも嬉しいよ。お礼に直人の初めての相手、してあげようか？」

そう言って顔を近づけてきた。俺はエッチのことかと思ってドギマギしていると
(チュッ)

と唇にキスをした。

「直人のファーストキスもらっちゃった」

姉ちゃんは笑って言った。俺は中学生のときに付き合った子とキスはしたことがあったが黙っていた。でも姉ちゃんは

「なーんだ。その態度はファーストキスじゃないのか、残念。結婚は冗談だけど私にとって直人は弟であり、親友であり、そして・・・」

少し間を置き

「心の恋人だよ」

と言った。心の恋人という表現が実際には恋人にはならないと言っているのに等しかった。それでも、そしてファーストキスじゃなくても、俺の心臓は飛び出しそうぐらいドキドキしていた。キスした瞬間は状況が認識できなくて態度に出なかつただけで、時間がたつにつれ頭がパニック状態になった。まだ唇に感触が残っている。

まだ聞きたいことはあるのに、何も言葉が出なかった。姉ちゃんはこれからどうするのだろう。妊娠のこと、仕事のこと、そして好きな人を失ったこと。恋愛感情とは少し違うかもしれないが、大好きな姉ちゃんに俺は何もしてあげられない。しばらく、多分2、3分無言の後

「おやすみ。姉ちゃん」

辛うじてそう言うのがやっとだったが、姉ちゃんも

「おやすみ直人」

とそれ以上は何も言わなかった。

次の日の朝目覚めると姉ちゃんはもう起きていた。それどころか居間に行くと、淳史と達也も起きていて、3人で話をしていた。達也が俺に気づき言った。

「聞いたぞ。お姉さんが直人の初恋なんだって？」

「あっ喋ったな」

キスしたことも話したのかと思って顔が赤くなるのを感じたが、さすがにそこまでは喋っていないようだった。

「寝坊するからよ」

姉ちゃんは笑って言った。

そして朝ご飯を食べた後、みんなで掃除をして帰り仕度をしていると、もう合宿も本当に終わりのなのだと感じた。遅ればせながら明日からは受験勉強に本腰を入れようと思った。まだ大学に行く明確な理由は見つからないが、少なくともこのまま何もしないよりは良いはずである。何かを始めることにより、他の色々なことが動くこともあるのだとこの合宿で学んだのだ。

この合宿が高校生活最高の思い出になったかはわからない。その答えが出るのは恐らく10年、20年後であろう。そしてまだ半年あまり高校生活は残っているのだ。少なくとも今の時点では、この合宿は俺にとって意味があるものになったはずだ。

姉ちゃんの問題は、姉ちゃん自身と周りの責任が取れる人たちで解決していくしかないように、俺たちの大人から見たら大した問題ではない悩みもまた、俺たち自身で解決するしかないのだ。何が子どもで何が大人なのかはまだわからないが、少なくとも「自分のやったこと責任をとる」、それくらいは出来るようになろうと思った。そして出発前の父親の言葉が少しだけわかった気もした。帰ったら久々にお酌でもして進路の話でもしてみようか。

そして帰路についた。勿論帰りも渡辺美里を聞きながら……。